

社会民主主義
フォーラム

全国
通信

No. 59

2024年
4月5日

〒102-0083

東京都千代田区麹町1-6-9

DIK麹町ビル704号室

TEL : 03-6272-8135

FAX : 03-6272-8136

Mail : forum-cho@iaa.itkeeper.ne.jp

目指す社会像を 政権の選択肢として提示を

フォーラム第4回総会では元毎日新聞編集委員の尾中香尚里さんに「立憲民主党に求められる課題」と題して講演を受けました。尾中さんは野党第一党の歴史を振り返りながら、今日の立憲民主党に求められている課題について、対立軸を明確に目指す社会像を政権の選択肢として提示することだと強調されました。裏金事件を契機に政権交代を求める声が高まる中、どのようなたたかひを作りあげていくか私たちにとっても大きな課題となっています。以下講演の要旨です（文責は編集者）。



今日は以下の三点についてお話をしようと思います。第一に平成の野党の歴史を振り返る。それによって現在の立憲民主党（以下、立憲）の存在意義について明らかにしたい。第二にその上で立憲に求められていることについてお話ししたいと思います。そして第三にかなり政治状況が動いているので、今後立憲がどのように対応したら良いのか、このあたりのお話したいと思います。

野党の歴史を振り返る－ 立憲民主党の存在意義は何か

最初に平成の野党の歴史、現在の立憲の存在意義は何かについてです。

昭和の時代の野党第一党は社会党です。厳しい言い方ですが、社会党は対立軸は非常に明確でしたが、政権交代の可能性は提示できなかったと思います。自民党は終戦から10年後に憲法改正を党是として誕生した政党です。自民党の結党は戦争の反省から

生まれた憲法や国家への一種のバックラッシュで、護憲を掲げてこれを阻んできた社会党の存在意義は非常に尊いものでした。しかしここにこだわるあまり、防衛ラインが改憲発議のできない3分の1になってしまった。社会党が自ら政権を取って、新しい憲法の考え方に基づいた政治を行うと言ってほしかった。これが政治記者になった当時、私が思った気持ちです。

平成の時代ですが、野党第一党は民主党でその前に新進党がありました。これらは社会党とちょうど逆で、政権交代は求めるが、一方で対立軸がわかりにくい、そういう政党です。リクルート事件によって自民党の政治とカネ、政治腐敗の問題がクローズアップされ、1994年の小選挙区制の導入へつながります。小選挙区制は政権交代可能な二大政党を作るためだと喧伝されました。私は本当にそうなのかと思います。選挙制度としては必然的に与党が巨大になりがちで、自民党の狙いはそこにあったのだと思います。

しかし政権交代可能な二大政党制というのがウソかという、ウソではありません。第一党と第二党の勢力が伯仲した場合、ちょっとした民意の変化によって、ドラスティックに政権交代する可能性があります。どこかで間違いが生じたら野党に政権が移ってしまう。そういうことがあってもいいように野党第一党も保守政党にしておきたい。だからその後保守二大政党ということが強く打ち出されることになりました。

この流れの中、自民党を離党した小沢さんに主導権を取られ1994年に新進党ができました。私は新進党ができた時、この政治の枠組みはおかしいと

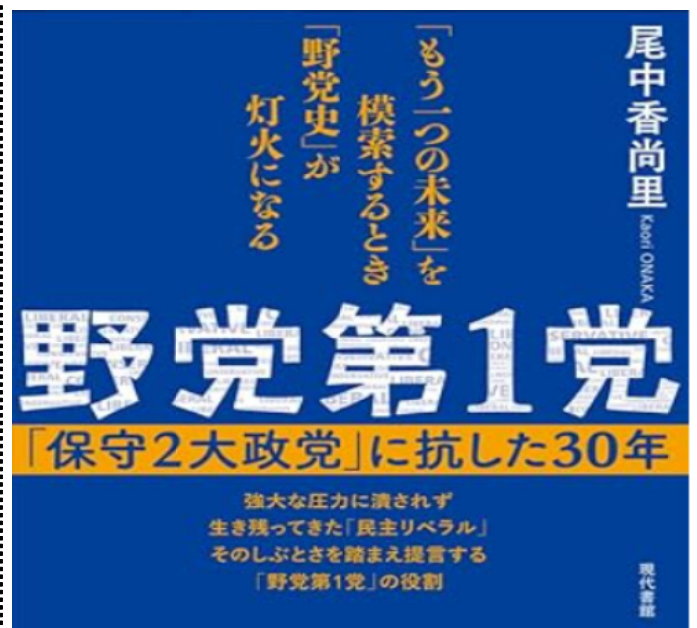
思いました。選挙で政権を選択できるようになるのに、どちらを選んでも大して変わらない。当然そう思った方がおられ1996年に旧民主党が誕生し三つ巴の状態になりました。二大政党なのだから自民党と新進党とどちらと一緒にいいのか、「ゆ党」じゃないかと言われました。そういう状態でしたが、総選挙で新進党は勝てなかった。小沢さんは翌1997年、新進党を解党してしまいます。

そして旧民主党は1998年新しい民主党をつくります。結果として5回の総選挙を経て2009年に政権奪取に成功します。保守二大政党を作りたい勢力にとっては「悪夢」でした。「悪夢の民主党政権」という言葉はその後安倍さんが使いましたが、「悪夢」と思っていた人は安倍さんだけでなかったはず。民主党は完全な保守政党にならなかったから。鳩山、菅、旧社民の方々が頑張られたし、旧自民党の方々も割とリベラルだった。枝野さんなどさきがけの方々もおられた。しかし下の方に保守の人たちもいて、結局民主党は何を目指しているのか、政権交代が実現した後、それが分からなくなってしまった。政権交代はあるけれども対立軸が不明な政治、これが平成の野党第一党だったと思います。

そこで令和の時代、立憲が誕生します。令和の政治への扉を開いたのが希望の党騒動です。保守とリベラルの寄り合い所帯の民進党を強引に改革保守政党に衣替えさせる、ちょっとしたクーデターです。「リベラル大虐殺」と言われた方がおられましたが、本当に私もそう思いました。こういう状態を「枝野起て」という言葉で乗り越えたのが枝野さんです。彼がたった一人で立ち上げた立憲が、直後の総選挙で野党第一党になった。これが令和の政治の幕開けです。

では立憲はどういう政党なのか。対立軸が明確で、少なくとも新自由主義から脱却して、枝野さんは社会民主主義という言葉は使いませんが、支え合う社会、リベラルな公の力で自己責任社会から脱却しようという明確な方向を持った政党です。小選挙区制度の下、この政党が自民党と対立し政権交代の選択肢として機能するという、そういう政党が生まれたのです。

55議席という小さな政党がと思われがちですが、小選挙区制度において野党第一党になるというスケールメリットはとても大きいのです。例えば民主党が下野した時、あの時は57議席でした。第二党が日本維新の会で54議席、3議席差まで迫りました。しかしたった3議席ですが野党第一党を維持できていたことで、維新はいまだに野党第一党を奪えないでいます。そして2017年に希望の党より5議席上回ったことが現在の立憲を作ったと言えます。第一党が立憲であったからこそ、そのすぐ後の参院選で議席を増やし、国民民主党や社民党から仲間を迎え入れました。2021年の2度目の総選挙では公示前議席は割りましたが100議席近く獲得しました。



これに対して「公示前議席を割った」「立憲はもう駄目だ」と、保守二大政党を求めている人たちから批判が起きました。「立憲よりも維新の時代だ」という人もいます。しかし立憲と維新の議席差は2対1まで開きました。野党第一党というのはそういうことです。大きかろうと小さかろうと常に政権への選択肢を担わなければならない、公器の役割を果たすこととなります。そして政権与党の勢いが陰ってくると、必ず野党第一党に求心力が高まってきます。たった100議席足らずと言われますが、今の立憲と自民の議席差はだいたい3割ぐらいです。民主党が政権交代した時の自民党との議席差は、実は今の自民党と立憲の議席差とほぼ同じで3割ちょっとです。

小選挙区制度というのは恐ろしい制度で、政権交代をしようと思ったらできる。簡単なことでも早々起こることでもないのですが、やろうと思ったらできないという状況ではありません。そして今そういう状況に來ていると自覚してほしいと思います。立憲はまだ結党から7年ですが、確実に野党第一党のあり様、日本の政治において野党第一党はこうでなければならないという理想像に向かってアップデートし力をつけていると思います。ぜひ皆さんに自信を持ってもらいたいと思います。

立憲民主党に求められる課題

次に二つ目のテーマ、今日の立憲民主党に求められていることです。これは五つにまとめてお話しします。

第一に誰が見ても野党第一党は立憲で泉代表が次の総理候補ということ、これを全国の皆さんにしっかり分かってもらうことが必要です。かつて2003年に民主党の議席は170ありました。このぐらいだと自民党に対抗する民主党と認識できますが、100に満たないと国民に対抗勢力だと認識してもらるのは難しいという思いはあります。加えて日本

維新の会に一定の数や求心力もあり、野党第一党が立憲だという認識をなかなか作りきれていない状況です。ただこの半年ぐらいで変わりつつあると私は思っています。立憲が野党のリーダーだという、そういう力を早く立憲がつけることが大切です。

最近、立憲の支持率もじりじり上がっています。そうなれば国民民主党も選挙協力を壊せないという状況が徐々にできてきます。共産党も「立てる」と言っても立てられない、立憲とたたかっている姿を見せたらあまり良くないという状態が生まれつつあります。市民連合の皆さんが共通政策をまとめましようと言うと共産党も出てきており、そういう状況をもっと推し進めて欲しいと思います。

第二に自民党に変わる政権の選択肢をはっきりと示すことです。支え合いの社会が重要であり、新自由主義は終わらせるということです。安倍政権の時代に「この道しかない」というキャッチフレーズを聞かされました。野党第一党に求められることは、本当に「この道しかない」のかと問うことだと思います。自己責任社会にしか生きられないと思って生きづらさを抱えている多くの有権者に、そんな社会だけではないはずだと、政治を変えればできると、少しでもリアリティを持ってもらうために活動する。これが立憲に求められていることです。



私たちはつい護憲だとか反消費税だとか反原発だとか、個別に具体的なことを言いそうになります。個別具体的な政策も大事ですが、危険なところはともすればごく一部を自民党が取り入れると、じゃあ自民党でもいいのかなとなってしまうかねないところです。残念だったのは2021年、菅さんが立憲に追い込まれて、政権交代はともかく、かなり立憲は伸びるのではないかと思われた時代でした。しかし菅さんが下ろされて、ちょっとリベラルに見えた岸田さんが登場した時、結構野党を支持していると思われた識者でもほっとした方々がいた。リベラルな岸田さんが出てきたからちょっと良かったかなと。そんなタイミングで選挙をやられたからこんな結果になったわけで、そういうことにだまされてはいけ

ません。

第三の課題ですが、「有権者の中には保守的な人もいる。保守的な政策も入れなければならないのでは」と、立憲を保守政党化しようという勢力もいます。しかしそれに合わせて自分たちの目指す社会像をずらしてはならないことです。保守とは何かということですが、安倍政権の言っている保守というのはただの右翼です。保守というのは多分、普通に町で商売とかやっていて、頼まれて自民党に入れてきたから、自分は保守かなと思っている人、そういうレベルの人のことです。保守思想をがちり持った人で、世の中が埋め尽くされているとは思えません。

裏金問題で怒っている人たちを見ても、頼まれて入れているうちに、変なほうに行っちゃったと思っている人がたくさんいると思います。だからこの辺の人たちは保守なのだから保守の政策が必要などと考える必要はありません。違う生き方、違う社会、違う政治がありますよと、その人たちに必ず通じる言葉、しかし70年代から慣れ親しんだ言葉では通じないかもしれない、だけど必ず通じる言葉はある。とにかく自分たちの旗印は変えない。だけどそこで使う言葉や接し方を変えることによって、彼らの考え方にアピールしていくことが大事だと思っています。

第四に少し矛盾する言い方ですが、旗印ははっきりと持つ一方で、立憲の党内やほかの政党の皆さんとの間の多様性は一定程度確保してほしいということです。皆さんもこの人はどう考えても自民党に行った方がいいと思う人がいると思います。でもこれから一票を頂こうとする国民の側もそれと同じです。だから自分たちの旗印は変えないけれど、異なる意見の相手への向き合い方とか付き合い方が大事になります。

そういう人たちを遡求していかなければならない時に、自分たちの中の人を排除するようではいけない。ちょっと違うなと排除していったら本当に政権など取れないと思います。敵をたくさん作り味方は強い人で固めていくのではなくて、あくまで弱くてほんわりしたような味方を少しでも大きく外に広げていかなければならない。今立憲の中で、旗印から少し遠いところにいるなと思っても、反党行為や党の外でおかしなことをやらない限り包容力のある広い心で認めていってほしい。そういう人が自分たちの手の届かない支持者をつかんでくる可能性がある。違うからと排除するようでは政権にはたどり着けず、そうしたところには気をつけなければならないと思います。

そして最後五番目です。目指す社会像をはっきりさせることと、政権を運営できるという信頼感をいかに両立させるかということです。支え合いの社会、脱新自由主義というと、左派だ、リベラルだ、批判ばかりだとレッテルを貼って、政権を運営する力は

ないと言ってくる人がいます。一方、政権交代ばかり言いすぎると、かつての民主党が言われたような寄り合い所帯だ、どうせバラバラになってしまうなどのレッテルが貼られます。野党はこの両方からの攻撃で苦しんでいます。これを立憲は両立させなければなりません。

幸いにして立憲の政権運営能力は今の自民党よりあると思います。コロナ禍や能登半島地震への対応を見ていても、東日本大震災の時の菅政権の方がよほどまともだったと私は思っています。あの東日本大震災だけしか見ていなかったら、何をやっているのか、だらしがないと思った方はたくさんいらしたかと思えます。比較の対象がなかったからです。東日本大震災の時に毎日新聞の政治部デスクをしていたものとしては、少なくとも立憲民主党政権だったらもう少しましなんじゃないかと、これが偽らざる実感です。ただそこがうまく伝わるかと言えば伝わりきっていない。政権を任せても大丈夫だという安心感をいかに抱いてもらうか、こうした努力がこれからますます大事になっていくと思えます。

激動する情勢— 政権交代が求められる中で

最後のテーマ、2024年の立憲に求められていることです。

昨年9月頃とだいぶ状況が変わってきました。まず立憲が完全に下げ止まって上向きになってきたことです。立憲が上がっていくことで第二党以下の野党が、例えば国民民主党が割れるなど動揺が生まれつつあります。第一党が強くなればなるほど、第二党以下は与党と野党とどちらにつくのが問われるようになるからです。維新も揺れるかもしれません。大阪でがっちり固めている執行部は保守勢力に近いわけですが、おそらく立憲が今一つだった時に当選した、大阪以外の人は案外立憲とはそう遠くない人たちがいるような気がします。そのうち維新は与党なのか野党なのかと問われてぐらついてくるのではという予感がしています。

でも一番揺れているのは自民党です。私がイメージしていたのは、そこそこまっとうな自民党ともちろんまっとうな立憲があって、片方が自己責任の社会、もう一方が支え合いの社会という大きな社会像

本気の政治改革実現に向けて 政治とカネの問題に対する立憲民主党の考え方

政治家本人の処罰強化	政治資金の透明性の確保	政治資金パーティー及び企業・団体献金の禁止
<ul style="list-style-type: none"> ● 連座制の導入 ● 政治資金隠匿罪を新設 	<ul style="list-style-type: none"> ● 収支報告書のデジタル化 ● 政治資金の外部監査を強化 ● 政策活動費は禁止 	<ul style="list-style-type: none"> ● 企業・団体からの寄附を禁止 ● 政治資金パーティーは全面禁止 ● 個人の寄附への税額控除を抜本拡充

の選択肢をかけて、それを国民に選んでもらうと、これが二大政党の理想だということです。ですがそれは自民党がまっとうであることが前提です。しかし今自民党はそういう状態ではなくなっています。

自民党は派閥の解散などと言っていますが、解散すべきは自民党そのもので、あの政党はもう耐用年数が過ぎたのではないかと思えます。そういう状態になっているときに、目指す社会像ということだけで立憲がたたかえるかどうか、あるいはそうしたたたかいを世の中が望むかどうか。自民党政治を倒すため、ありていに言えば目指す社会像を共有できない維新との連携したたたかいをどういう風にするのか。こうした課題を含めこの先どういう政治状況が生まれていくのか、まだまだ読めないところがあります。

こういう激動はリクルート事件から細川政権誕生の時代に匹敵する状況ではないかと思えます。ですから今後、立憲がどうすべきかということも今の自分でも言い切れないところがあります。ただ、まさに希望の党騒動の時に、一日遅ければ本当に「リベラル大虐殺」の時に、瞬時の判断で枝野さんが立ち上がって立憲が第一党を勝ち取ったように、本当に政治の状況をよく見て、一瞬で間違いのない行動をとるということが求められる状況に来ていると思います。私自身もそういうつもりでこれからの政治を見ていきたいと思うし、皆さんもそうであってほしいと思っています。

全国自治体議員夏季研修会のご案内

●日時 8月18日(日)13時～19日(月)13時

●場所 宮城県仙台市・秋保温泉 緑水亭

●参加費 2万円(交通費は参加者負担)

●内容

1, 総会

2, 研修会/地方自治法と地域防災の二つのテーマ

で基調講演を予定しています

3, 夕食交流会

4, フィールドワーク

※仙臺緑彩館、震災遺構荒浜小学校を視察